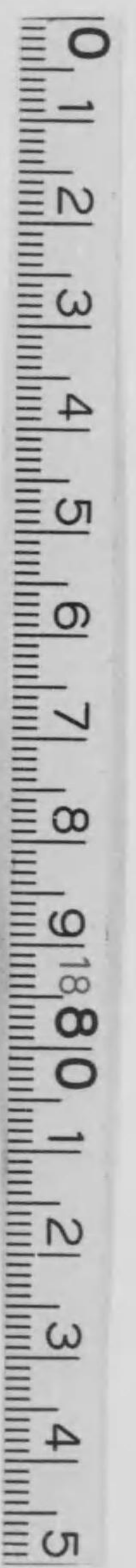


275.6
29



始



#60-24

275.6-29

~~雑誌~~
~~77~~



目次

序論……………三

入學準備狀況及其その影響……………八

一 入學準備の實狀と影響……………一八

二 障礙と勉學時間並に受験回数……………二五

入學試験と入學後の心身狀況……………二九

一 調査の方法その他……………三〇

二 身體の狀況との關係……………三五

三 學業成績との關係……………三五

一 入學總點數と入學後の成績……………三五

寄贈本

大正
15. 3. 10
寄贈

2

- 二 入學算術との關係……………
- 三 國語成績との關係……………
- 四 作文成績との關係……………
- 五 入學試験成績と高等諸學校入學者……………
- 附 他の撰拔法についての考案……………
- A 心理検査……………
- B 小學校の成績……………
- 四 總括……………
- 結論……………

入學試験に關する調査

文部省學校衛生課



序論

教育界の問題として、近年入學試験の問題ほど喧ましく論議せられたものはないだらう。入學難緩和運動、入學試験の改良、乃至撰拔方法の改良等の論議、運動はやがて學校増設メンタルテストの流行、小學校成績の参考、抽籤入學、申込順入學、口頭試問法等の種々なる實行を見るに至つた。併し乍ら問題は依然として残り、人々はやゝこの論議に疲れたかに見える。

3
これを世の實際に見るに、入學期にある兒童乃至青年をもつ父兄の心勞は極めて著しき

ものがある。「私のところの子供も來年は中學校ですが、どうしたらよいでせう」とか「どう云ふ風にやれば入れるでせう」とか云ふことは至る處に聞くことであつて、もし一度入學試験に直面する様になれば、母親、父親は殆んど異常な精神の緊張を以て子供を鞭撻し兒童もまた懸命に朝早くから夜おそくまで勉學するのである。が、これは果して兒童自らかく苦しまねばならぬであらうか。あるひは問題は反つて求められた苦しみと云ふ觀がないであらうか。

實際今日の入學難は著しい。全國の統計によれば、入學志願者の半數は入學ができないで翌年に延ばさねばならぬ實狀である。その第一の原因は學齡兒童の増加——換言すれば人口の増殖である。實に最近十年間の兒童の増加は約二百萬を數へるのである。けれども原因は單純にそればかりではない、中學校の生徒收容數はこれにやゝ比例して増加しつつあるからである。そこには好學心の向上と云ふ重大な原因の存してゐることを認めなくてはならぬ。つまり以前にも増して、中學校へ入學しやうと志望するものが多くなつたと云

ふ原因がそれである。

而してこの好學心の向上と云ふ事は勿論一般國民の教養に對する理解の向上と云ふ事もあつて、極めて喜ぶべきことではあるけれども、その一面にはまた極めて非教育的なる態度の強められて來たと云ふ事實を知らねばならぬと思ふ。それは一般社會の學校教育過重の弊と云ふことである。この點に於て入學試験の問題の解決とは、社會一般人のこれについての理解に俟たねばならぬものがあつて、こゝに入學試験問題は社會教育に俟つべき重大なる一面を有してゐるものと云ふ事ができる。

わが國の文明はその建設極めて新らしきがために、その人材登用の方向を學校教育にまつてゐた。官吏の任用の如き、教員の任用の如き以前には學校を卒業せしことのみを以てその標準としてゐたのである。従つて社會重要な地位は學校卒業者の占むるところとなつた。そこで、かくして地位を獲得した人も、かくの如きために地位を得なかつた人も、みな學校をやらねば相當のものにはなれぬと云ふ事を感じ得る様になつた。ために學校教育

を受けるに適したものであると否とに拘らず、親は子を學校へ無理に追ひ込もうとするわけである。いはゞ教養即ち學校教育と考へ、學校卒業即ち優位の生活と考ふる學校病患者となつて居るのである。

かような學校病患者は、比較的兒童の性能について理解してゐる教師の忠言をきゝ入れる程の餘裕をもたぬ。「あなたのお子さんは中學へなど入れずにお家で家業をさせたらどうです」とか「とうてい今の學力では中學校へは入れません」などゝ云ふと、「いや中學校位卒業しなければどうもろくな者にはなれませんから、どんな無理をしても中學だけはやらなくては」とか「いや落第してもよいから是非受けさせて見ませう」とか答へて、省みない。兒童の智能には個人的に差があつて、その劣つたものは中學校をやらせることが極めて無理なことのあると云ふことを説いても理解しないのである。とたり近所の子供が中學へ入るのだから家でもさうすると云ふのが常例なのである。

かくて、子供はその材能の有無、高低にがゝはらず親の誤れる子に對する愛情と、その

名譽心(?)とのために入學の準備の重い負擔を課せられる。そしてそのはげしい勉學のため、身體、精神共に疲れ果てると云ふ結果に陥るのである。——これ等は後にあぐる調査に見れば明かである。——しかもその悪影響は殊に智能低き、不相當なる負擔を受くるものに於て著しいのである。かようなわけで、入學試験問題の實狀を見ると、その一半は父兄の問題である。存分に疲れるのも父兄である。鞭撻に心をいらだゝせるのも父兄である。無理やりに學校に入れやうとするのも父母たちである。もし父母にして兒童の智能の程度を察して學校の入學を考慮し、これに適當せる學校を選んで、相當の勉學をする様になれば、入學難の問題はやゝこの方面から光明を得ることゝも思はれる。さきに或は求められた苦しみではないかと云へる理由は即ちこゝにあるのである。

こゝに入學試験について社會を教育する必要があるのである。今諸種の入學試験に關する調査を公にすることは、一にこの一面の社會の教育に一つの資料を提供する意に外ならぬのである。

第一 入學準備の状況及其の影響

一 入學準備の實狀

東京市内に在る公私立高等女學校三校について、某年度入學者四百三十九人について、その入學準備をはじめた時期を訊して見ると、次の如くである。

開始時期	實數	%
一年前	五二	一一・八
第一學期	二六	五・九
第二學期	一六	三・六
第三學期	一〇	二・三
當年		

入學準備を開始したる時期

開始時期	實數	%
四月	八七	一九・八
五月	三五	八・〇
六月	二一	四・二
七月	九	二・一
八月	九	二・一
第二學期	一五四	三五・〇
九月	一一一	二五・二
十月	二二	五・〇
十一月	一一	二・五
十二月	一〇	二・三
第三學期	六一	一六・三
一月	四一	九・四
二月	一七	三・九
三月	一三	三・〇

これによつて見ると、最も多いのは尋常六年の一學期にはじめるもので、二學期から始

めるものこれにつき、この二つの時期からするものが三分の二を超えるのである。けれどもすでに一年前にはじめるもの、二年前にはじめるものも相当にあるのであつて長き間の重き負擔を擔はせしめるものがある。

以上は高等女學校生徒についてであるが、尙一層競争の激しい中學校について——生徒七十三名について——見ると、この關係はより以上甚だしくて二年前にはじめるもの七パーセントに達しようとし、一年前のもの四十パーセントであつて、一層準備の期間は長いものと見られる。今この男女中等學校志願者の準備期間を計算して見ると、次の様であつて、いかに長い間多數の成長期にある兒童が、このために時間を費してゐるかど視はれる。

高等女學校生徒 (四三九名平均)

八・九ヶ月

中學校生徒 (七五名平均)

一三・八ヶ月

單に試験準備は長い期間行はれると云ふだけではない。その間に異常に多い勉學の時間

をこれがために費してゐる。今一日三時間以上勉強してゐるものゝ数を當年の各學期について調査して見ると（高等女學校に就て）

第一學期	一〇・七%
第二學期	一八・〇%
第三學期	三一・六%

と云ふ結果を見るのであつて、この中には一日五時間六時間を費すものも珍らしくなく中には寢食の外は全くこれに没頭すると云ふ様なものもある。

元來この時期に於ける適當なる勉學時間は、ケイに従へば學校課業を含んで六時間である。であるのに、學校を含めば八時間以上のものが右の如く多數あるのであつて、かくの如き兒童は自然、——食事や、洗面の時間を省くことはできぬから——睡眠時間を減じ、運動時間を減じ、また食後の時間を割くことになる。従つて睡眠不足を來し、運動不足を招き、消化障礙を起すと云ふことは直ちに了解し得るところである。

かくの如くであるから、今、種々なる——次表の項目にあげる様な——健康上の事項について質問を發してその答を検して見ると意外に多數の身體上の障礙を來してゐるのを見るのである。

まづ、生徒が自ら意識し、あるひは、族の氣づいた障礙の有無並に數について見るに、次の様な結果が高等女學校生徒について得られた。

	實數	%
全く障礙なきもの	二二一	四八・〇
一人にて一件の障害	九八	二二・三
二	五七	一三・〇
三	四二	九・六
四	一四	三・二
五	五	一・一
六	七	一・六
七以上	五	一・一

一 頭 痛
 二 體 重 減 少
 三 食 欲 減 止
 四 血 色 不 良
 五 近 視 眼

實 數
 一 一 五
 六 四
 六 一
 五 二
 四 八

正 員 に 對 する %
 二 六 〇 二
 一 四 〇 六
 一 三 〇 九
 一 一 〇 九
 二 〇 〇

この結果から見ると約半数は自覚ある障 碍を経験してゐるのであつて、實際にあたつて種々な健康上の調査をして見ると、著しい障 碍を來してゐるものと見る事ができる。では、如何なる障 碍があるか、すでに述べた様に試験準備期にある兒童はその生活に於て睡眠不足し、運動不足し、消化障 碍を豫想する事ができるのであるから、その障 碍と稱するものも、多く神経系統及び新陳代謝機能に屬するものであることは疑ひなきことである。實際兒童についてこれを調査して見るに、

計

四三九

一〇〇

六 症	四四	一〇〇〇
七 不	四三	九・八
八 鬱	三八	八・七
九 血	三一	七・〇
計	四九六	一〇〇

の如く、その障害は神経性障害若くは新陳代謝機能障害に歸することができるのであつて、すでに述べた様な準備時期に於ける衛生の状態から來るものと考へられる。

二、障害と勉學時間並に受験回数

かくの如くして、現在の入學準備は明かに兒童の身體上、從つて精神上にも少なからぬ悪影響を與へてゐるのであるが、この影響の來る状態については尙一層精細な觀察を必要とする。即ちかゝる障害が、いかに勉學時間の多少に相關係するかと云ふ事と、すでに述べた様な知能との關係についてである。この二つの事は、以上の様な事實に基づいて世の兒童の

勉學時間(一週)	障碍件數(平均)
一—五時間のもの	〇・一四
六—一〇	〇・八六
一一—一五	一・四三
一六—二〇	一・〇七
二一—二五	一・二二

父母に反省を促し、自覺を促すために最も大切なことと思はれる。即ち兒童に勉學をさせてもこれに適當な時間、あるひは少なき時間を充てさせれば障碍は無くなる事ができるか、或はそれでも障碍を去ることはできぬかと云ふことは、兒童生活を規定する原動力となる父母をして考慮の餘地を残さしめるであらうし、智能に相當した學校を選ぶことによつて障害を無くすることができるか否かと云ふ事は、自己の子供の頭腦を考へて學校を選択するための考慮に機會を與へることが多いと思はれるからである。

まづ勉學時間と障害との關係に付て見るに、次の如き著しいものを見出すことができる。

二六—三〇 同
三一—三五 同
三六時間以上

一・〇六
一・二五
二・二五

即ち勉學時間一日一時間内外——上の時間は一週を六日としての時間数であるから——であればさほどの障碍はないのである。ところが一日二時間（一週一以上）になると必ず一件位の障碍が起ると見べきで、それが六時間以上と云ふ様な多くの時間をこのために割いてゐるのを見ると、極めて著しい障碍が起つてゐると見なくてはならぬのである。この點から見ると入學準備は徐々に長くやることにすれば、さほどの害を後に残さない結果となり得るのであつて、この意味からすれば、父母は子供の時間的生活の規定に關して、規則的に短時間、注意を緊張させて勉學する様な習慣の教養に意を専らにすることが、大切と云はなくてはならぬのである。

次に兒童の智能との關係について考へたい。兒童の智能について直接知ることは、この場合困難であるが、その試験を受けた回数換言すれば落第した回数は略これを表はしてゐ

ると云つてよい。また、それは少し早計に過ぎるとしても、こゝに調査した兒童はいづれもすでに女學校に入學してゐるものであるから、いく度落第してもとにかく入學したものである。一度受けたと云ふものも、三度受けたと云ふものも、結局は今の學校に入つてゐるのである。であるから、他の學校を受けなくてもそこには入つたのである。他は受けなくとも宜かつたのである。つまり自分の智能に丁度適當した今の學校さへ第一に受ければ宜かつた譯である。その意味に於て試験回数は、兒童の負擔の輕重をも示すものと見られる。こゝに受験の回数と、健康障碍との關係についてたどつて見ると、次の様な結果が示されるのである。

受験の回数

障碍平均

一回(失敗しないもの)
二回(一回失敗したもの)
三回
四回

〇・九七
一・二六
一・一六
一・六〇

そこに多少の不規則な傾向は見られるけれども、要するに回数が少ないものに故障少なく、回数が多いものに故障が多いのであつて、この事はその児童の智能に相當した學校を選んで受験した児童は比較的その害が少なく、これに反し自己の智能に省みることなく、たゞ徒らに志願者の多い困難な學校を受験し落第したものに於て、その障碍の多いことを推察せしめる。この點に於て世の父母の充分注意すべきものが存すると思はれるのである。

X

X

X

以上、われ／＼は、現今の入學難問題の一面たる入學準備のための児童の過重負擔についての種々なる方面の觀察をなしたのであるが、かく見來れば、すでにさきに述べた如く社會の教育によつてその一面の切り開き得るものあるを知るに難くないと思ふのであつてこの點社會教育の力に俟たねばならぬのである。

第二 入學試験と入學後の心身狀況

一 調査の方法その他

すでにわれ／＼は中等學校入學試験準備によつて、児童が過重な負擔を課せられ、その結果として身體の健康上種々なる障碍を來してゐることを知る事ができた。従つてこれ等の障碍が精神上にも來さしめられてゐることも推定することができる。

かくの如き障碍は、單に一時的の障碍としてやむべきものか、あるひは長く影響を残して入學後種々な不健康の状態を誘致してはゐないか、と云ふことはわれ等の以上の事實について知らんと欲するところである。

19 更に、かくの如き重き負擔を課して尙存しつゝある入學試験が、その撰擇効果をいか程まで有してゐるものであるかと云ふことも興味ある問題であつて、この問題は一面撰擇方

法の研究ともなるべきものであるから、一層これについて知る必要を感ずるのである。
 以上の如き理由によつて、この調査は、東京府立中學校一校及府立高等女學校一校について、すでに卒業せる生徒についてその入學當初より、卒業したる後に至るまでの學業、健康の状態について比較的詳細なる觀察をなせるものである。これ等はその調査の關係上入學試験としては比較的以前のそれである關係もあり、また東京に限られた特殊の事情もあることと信ずるが、參考のために提供したのである。

二 身體の狀況との關係

身體の發育を視ふものとしては、たゞ身長、體重及び胸圍等の材料より外はない。今本調査によるものと文部省の全國學生生徒兒童十八ヶ年間平均とを比較して見るに

身長

學年比較	中 學 校		女 學 校	
	本調査成績	全國平均	本調査成績	全國平均
一 年 年	四・六六	四・二四	四・六七	四・四六
二 年 年	四・八八	四・六三	四・七一	四・六三
三 年 年	五・一〇	四・八四	四・八八	四・七六
四 年 年	五・二〇	五・〇五	四・九〇	四・八五
五 年 年			四・九〇	四・八九
差	〇・四二		〇・二一	〇・二二

學年比較	中 學 校		女 學 校	
	本調査成績	全國平均	本調査成績	全國平均
一 年 年	八・八九〇	八・〇〇三	八・六一四	八・二三〇
二 年 年	一〇・二八〇	九・〇〇三	一〇・一六三	九・三三九
差	〇・八八七		〇・三八四	〇・三四四

胸圍		
年	比較	差
三年	110.566	1.204
四年	110.880	0.845
五年	111.050	1.105

年	中		女	
	本調査成績	全國平均	本調査成績	全國平均
一年	22.33	22.6	20.96	21.3
二年	22.35	22.5	21.66	21.3
三年	22.48	22.5	21.5	21.3
四年	22.54	22.6	21.9	21.3
五年	22.54	22.6	21.97	21.3

となつて、その發育上から見る時は女の胸圍を除けば何れに於ても全國平均に比して勝

り、且つその差違の數から見ても特に入學當年に於て入學試験のためと推定さるべき減退又は急激なる反動的増加を見ないのである。併しながら全國の平均も亦此影響を蒙むつて居るのであるから、この比較はやゝ無意味に近いと云はなくてはならない。

之を思ふに入學試験の影響は前述の如くその體重に及ぼすものもあるも一時的のものであつて、長くその跡を残すと云ふことが少ないものと見られる。

尙茲に本調査直接の目的には關係はないが、注意すべきは之等の生徒の身長及び體重の何れに於ても、全國平均より多い事實である。之れは即ち都會地の生徒の發育が一般に良好であるに依るのであらう。但し身長體重の増加に比して胸圍の差が少ないのは、瘦軀の者の多いことを證して居るものである。

以上述べた所は、單に身長及體重の關係であるが、身長及び體重の關係だけでは兒童生徒の健康を知ることには出来ない。それで病氣缺席の状態を調査する必要があるのであるが中學校に於ては病氣缺席と事故缺席とが區別されてないために、茲に得た統計はその價値

が少ないが、今その一年間平均の缺席日数を示せば次の如くである。

	一年	二年	三年	四年
中 學 校	二・九	九・九	七・二	一九・五
女 學 校	一五・〇	四八・五	四五・四	四九・〇

これに依つて見ればその平均缺席日数は一年に於て却つて少ない状態にあるけれども、これは二年の時から流行性寒胃が流行したためにこの数が表はれたものと見るのが至當であると思ふ。そのために缺席の状況から推してその健康状態を覗ふことは出来ない。

斯の如くであるから、これ等よりわれ等の當初目的とした觀察は極めて不完全にしか達せられない。けれども諸種の状況より徴すれば相當に健康上の影響は残るものと見られる。たとへば近時高等女學校もしくは、中學校下級生に於ける近視眼の増加の如きは、第一に述べた諸障碍の一として近視眼のあげられてゐる事から見れば、その間の消息を推定するに足りるものがある。また當該中學校長が、下級生に於て——殊に一年に於て——休學

するものゝ他の學年に比して多數なるは、その原因の神經衰弱なるに推しても、又かゝる入學試験の影響の尙残り、且甚だしくなるものあるを語るものと云ふ事ができる。

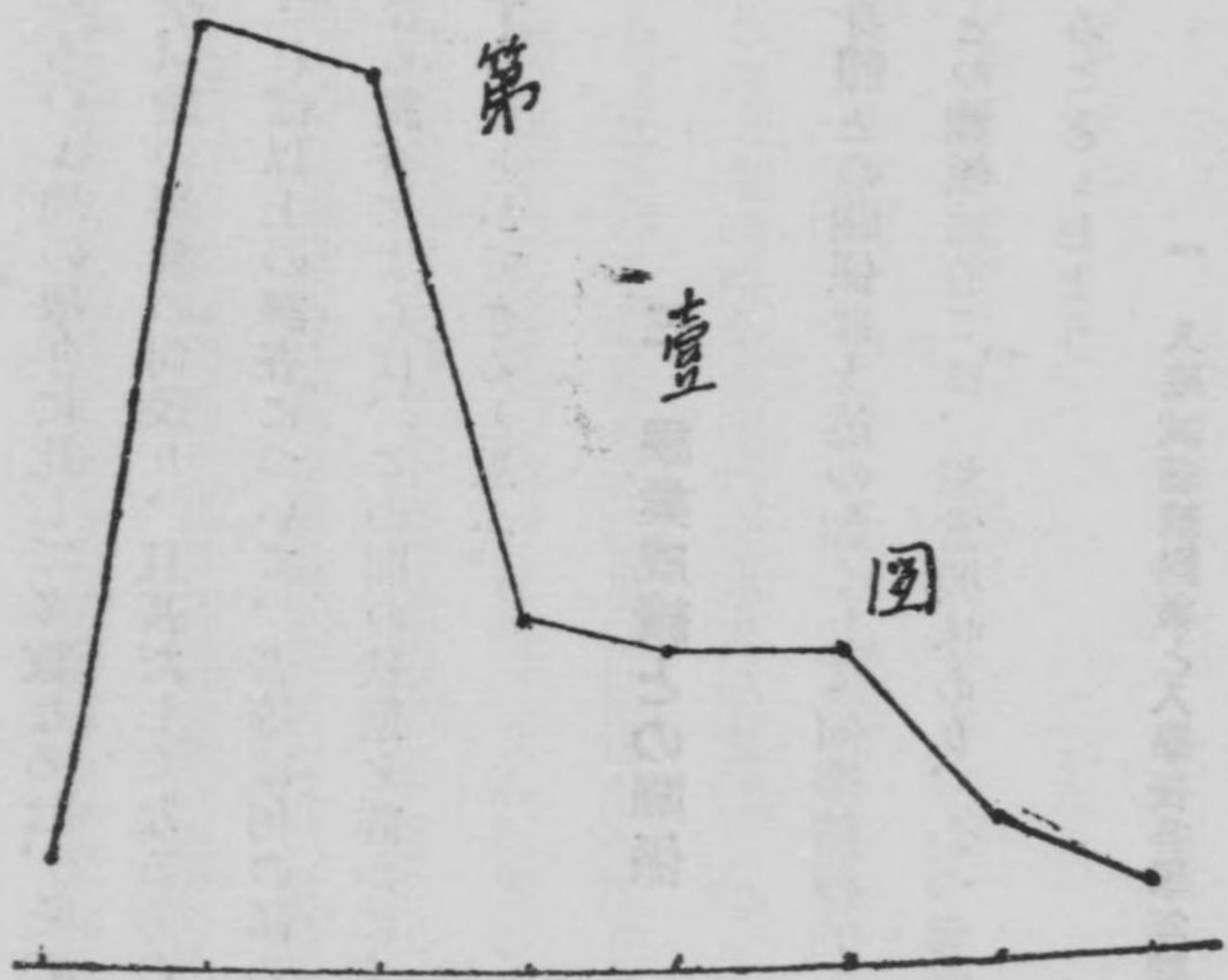
されば以上の調査について、吾等は何の語るべきものを有しないのであるが、尙一層精密なる調査によれば、この間の状態を詳かにすることができ、その影響の残るものあるを證することができると思ふ。

三 學業成績との關係

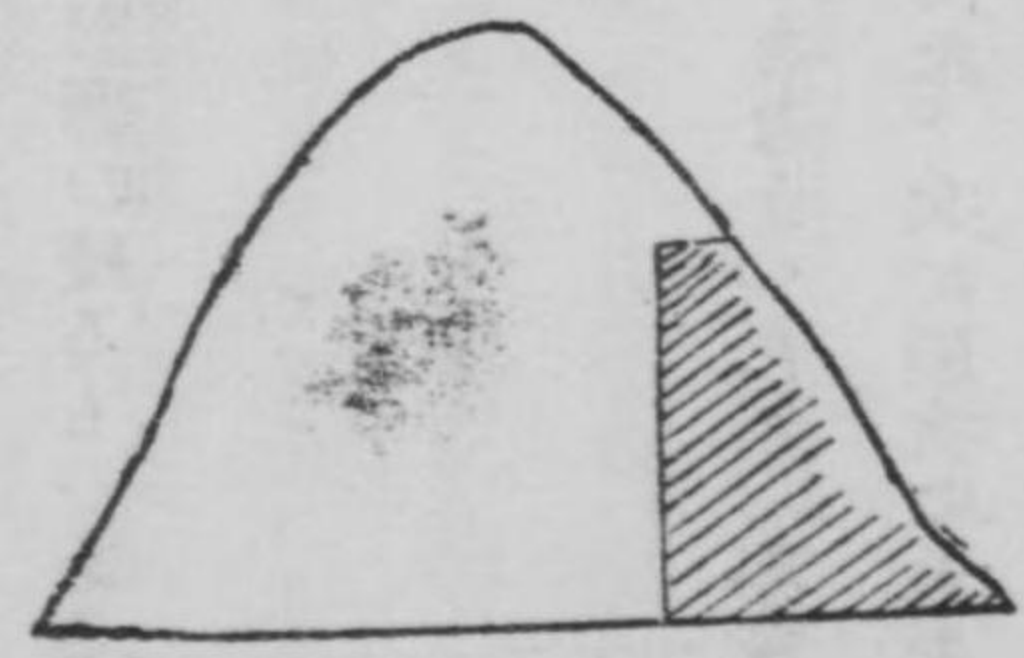
身體との關係は上述の如くして何等積極的結果を得ることができなかつたが、學業成績との關係に於ては、相當興味あり、かつ參考となるべき結果を得た。次に順次これを述ぶることゝしよう。

一 入學試験總點數と入學後各學年總點數との關係

先づ中學校について、その入學試験の總點數の分配を見るに、第一圖に見る如く七九乃



九一—九二·五(3人)
 八九—九〇·五(6人)
 八七—八八·五(11人)
 八五—八六·五(11人)
 八三—八四·五(12人)
 八一—八二·五(34人)
 七九—八〇·五(35人)
 七七—七八·五(5人)



第二圖

入學點數	總數				計
	一年	二年	三年	四年	
七九・八〇・五	五	四	二	一	一九・五四・三
七九・七六・五	〇人	一人	〇人	〇人	一〇・〇〇
八二・三・五	〇%	〇%	〇%	〇%	九二・六・五
	七二・〇	四二・四	二五・七	六一七・〇	
	二・九	五・四・七	二・五・九	一・二・九	
	三	五	二	一	

各學年落第生と入學試驗點數

至八〇・五が最も多くこれより點數を増せば漸次人數を減ずることがわかる。これは明かに第二圖に見るが如く分配線上部の一部をとつたものである。即ち七七―七八・五は同點數中の極少部分を詮議して採つたものと見られる。然しながらこれ等百十七人中四十四人(三七・六%)の落第者、即ち一年の時九人(七・七%)二年の十五人(一二・八%)三年七人(六%)四年十三人(一一・一%)を出してゐるのである。今各學年落第生數と入學試驗點數との關係を見ると次のやうである。

八五—八六・五	八七—八八・五	八九—九〇・五	九一—九二・五	九三—以上
	一			
四	二	二		
二	一			
二	一			一
※				
一	※			
		一		
		※		
	二		※	
		一		※

即ち入學試験成績に於て最も點數の少ない者に於ても四年末に優等の成績の者を出し、最優等生は八一乃至八二・五の中から出るといふ現象を呈し、入學試験に優等なるものにも、比較的成績の優れない者がある状況である。これに依つて見ても四年生に於て甚だ良好な成績の者でも必ずしも入學試験に於ては成績良好ではなかつた。即ち入學試験當時に表はしてゐた成績は四年に至つてはその跡を止めないのである。それ故に入學試験の成

績に依つて入學後四年間の成績の如何を推定することは殆んど不可能であると云へる。

この事實は入學試験成績の總點と入學後各學年の成績との相關係數にも表はれてゐる。

一年末の總點	十〇・一八〇
二年 同	十〇・一七九
三年 同	一〇・一七二
四年 同	一〇・四〇

相關係數は二つのもの、關係の程度を示すので、たゞへばもし入學試験成績と入學後の成績とが全く一致すれば係數は十一・〇〇になり全く相反すれば、 -11.00 となる。されば十一・〇〇に近き程一致の多きを示す。

となつてその間の關係は稀薄で、入學後四年に於ては却つて負の數さへ示して居るのである。

更に此を女學校の成績に就いて見ると次の如くである。(P・Eは蓋然錯差にして相關係

數のたしかなるためにはその三倍以上あるを要す

第一年末成績	・三四	(P・E)
第二年 同	・二〇	(〇七)
第三年 同	・一八	(〇七)
第四年 同	・三五	(〇七)

これに依つて見ても第四年の結果を除いては漸次相關係數が減じて來るのがわかる。

此れ等の數字は嘗て田中寛一氏が東京高師附屬中學及び東京女高師附屬高等女學校に於て調べたものと略一致して居る。今その數を見ると

	中學校	女學校
一年 後	・一一六	・六〇一
四年 後	・〇五〇	・二二三

これ等を考へれば、入學試験を全體として見る時に入學準備の影響は漸時減じ、一方入

學試験總點數に依つて知り得るといふことは、一年時代を除いて殆んど不可能と見るべきである。

尙こゝに注意しなくてはならないのは、入學試験の成績が、漸時學年の上るに従つてその關係が稀薄となつてゆく理由は、或は入學試験に於て良成績を得んとして餘りに準備に力を注ぎ過ぎた結果、その精力を消耗したために漸次成績が減退するのではないかと思はれる事である。

二 算術成績との關係

算術の成績は入學試験に於て最も重んぜられてゐる。即ち試験の合格不合格は主として算術の成績の如何によるのであつて、算術の成績が不良な場合は殆んど入學が出来ないと云つてもよい位である。

しかしながら算術がそれ程入學者の運命を支配してゐるだけ、それだけ成績の豫知が出來、又その練習の効果が後年まで及ぶかどうかは大に疑問である。今その關係を見ると、

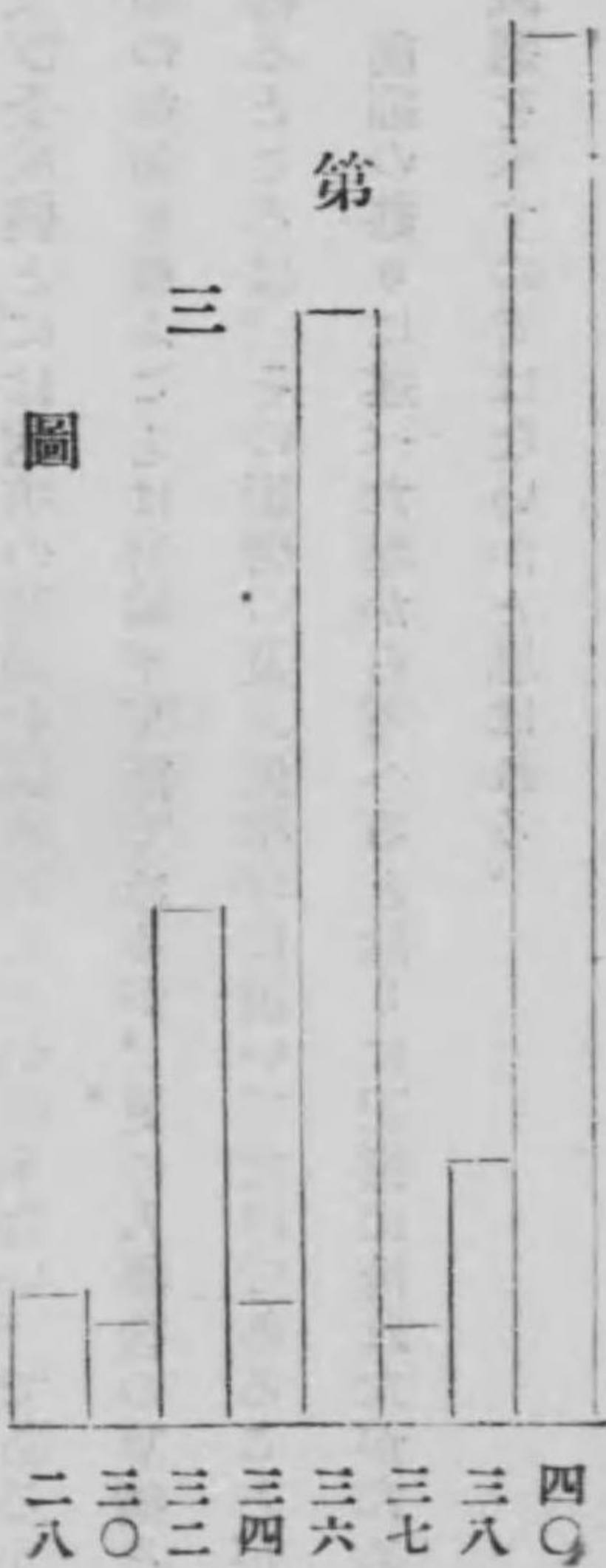
先づ落第生の数は

年	一 年		二 年		三 年		四 年		計
	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	
三〇 以下(四人)	二人	五〇	三人	七五	一人	二五	二人	五〇	八人
三一—三四(一七人)	四	二三・五	二	七〇	一	五九	二	二七	九
三六—三八(四六人)	一	二二	六	一三〇	二	四三	八	一七・三	一七
四〇 (四九人)	二	四一	六	一三五	四	八二	五	一〇二	一七

であつてその關係は稍々總點數に於ける關係に類似し、その數は又成績の悪い者に稍々多いけれども、その間に何等の區別をすることは出来ない。

しかも算術の成績點の分配は甚だ高點が多く又成績の段階も少なく、到底その間に區別を設けることは出来ない状態である。第三圖に示すものがそれであつて四〇點(滿點)最も多く、點數は凡そ三階段に分れてゐる。即ち四〇點四十九人、三十六點四十一人三十二點

て相關係數によつて見れば算術と入學後の成績との關係は



十五人であつて最高點が最多數である。故にこの最高點者の中から後に落第生の出ることは又止むを得ないと云はねばならない。而して

中 學 校	一 學 年	二 學 年	三 學 年	四 學 年
女 學 校	一〇・三三	一〇・四	一〇・五二	一〇・三二
	〇・〇八	一〇・一	〇・三	〇・〇八

であつてその間に少しも關係を糺すことが出来ない。然らば算術の練習が入學後如何程まで算術の成績に効果を及ぼすか、又算術の點が入學

後の算術の成績を何處まで豫知するか、今女學校に就て見ると

一年 (●一九 P、E 〇八) 二年 (●〇六四) 三年 (●〇四八) 四年 (●〇七八)

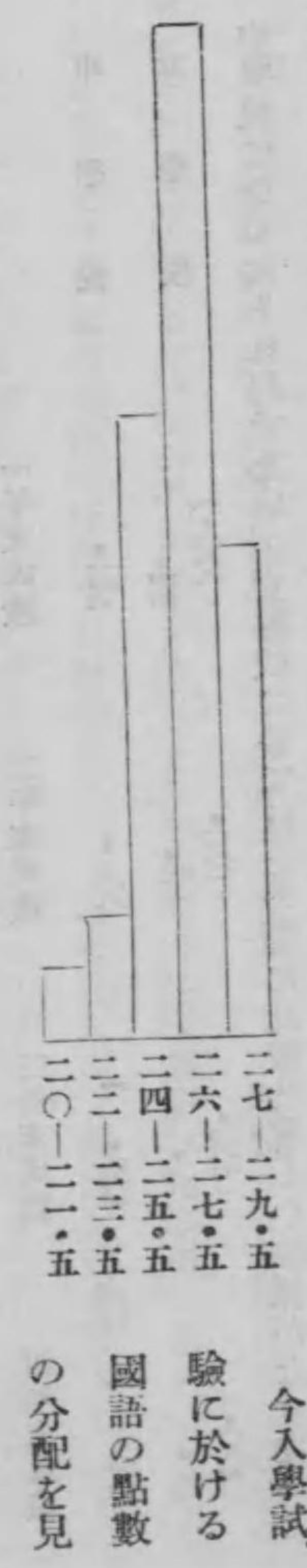
であつて、第一年に於てはその間に稍々その關係を認めることが出来るけれども、以後の學年に於ては殆んど之を認め得ないのである。

要するに算術の點數は入學時に於ては非常に重要な部分を占めてゐるけれども、その準備の効果の及ぶと考へられるのは第一學年の算術成績だけであつて、その後の數學の成績及び全成績とは何等の關係を認めることが出来ない。であるから之に依つて入學後の成績の如何を覗ふことは勿論不可能であるが、更に入學後の算術そのものゝ成績さへも知り得るところは、その影響の及ぶ低學年に就いてだけであることがわかるのである。

前節の終りに述べた點から考へると餘りに記憶に流れたがために、それこそ眞に能力の減退を來すのではないかと思はれる。

三 國語成績との關係

算術と共に讀方もまた入學試験に於て重要な位置を占めてゐる。入學試験の成績は殆んど算術と讀み方とだけで決すると云つてもよい位である。



ると、二六點一二七・五點最も多く二四一二五・五が之に次いでゐる。しかして算術の成績に比べて見れば、總成績は十六段階に分れて個人的段階が甚だ多いのである。今これ等成績別によつて落第者の數を見ると

Year	Number	Percentage
一年	1	100%
二年	1	100%
三年	0	0%
四年	0	0%
五年	0	0%

二四一・二五・五	三	九・四	二	六・三	三	九・四	〇	〇	八	二・五
二六一・二七・五	五	八・六	八	一三・八	二	三・四	八	一三・八	二・三	三九・六
二八一・二九・五	〇	〇	四	一六・七	一	四・二	二	八・三	七	二四・二

であつて大體は成績の悪いものに落第生が多い。しかし成績のよいものにもまた相當の落第生を出してゐる。更に入學後の成績と入學試験の成績との相関係数を求めると次の如くなる。

(一印マイナス)

	一年末成績	二年末成績	三年末成績	四年末成績
中 學 校	・二四六	・一〇八	一・〇六四	一・〇六六
女 學 校	・四〇〇 (・〇六八)	・三三三 (・〇八〇)	・三六 (・〇六七)	・三〇 (・〇六四)

中學校に於てはそれ程でないが女學校に於てはその間に比較的著しい関係がなり立つてゐる。これは中學校に於ては落第生を除外したが、女學校に於ては落第生が殆んどないためにその関係が一層明かに出たものと思ふ。

これを算術の成績と比較して見ると非常な相違がある。即ち算術は各學年の總成績との関係は著しいものがないのに、國語に於てはそこに可なり著しい関係があるのである。これは入學試験準備が長く影響するのであるとも見えるが、入學試験には算術にその準備が傾注され、國語の方にはその準備が少ないのと、一方その範圍が廣いために手薄すになることから推して、算術の成績が修飾された能力を示すのに比して、國語が眞の能力を示すのであると考へられ、又國語の試験の性質が比較的兒童の學習能力を見るに便あるがためと考へられる。それ故に、入學試験の國語と入學後の國語成績との相関係数は田中博士によれば

一 年	〇・一〇六	四 年	〇・一三三
-----	-------	-----	-------

となつて居り、これ又相當の關係を示してゐるのである。

四 作文成績との關係

入學試験の作文は、近來最もその兒童の素質を表はすものと考へられるやうになつて來

たが、これが果して適當であるか否かを見やうと思ふ。

入學試験の作文點數と、各學年末總成績との關係は

一年	一・〇二八	二年	一・〇七	三年	一・二五	四年	一・〇〇八
----	-------	----	------	----	------	----	-------

であつて何等の關係をも見出すことは出来ない。
思ふに作文の點數は教師の見方によつて甚だ異なるものであつて、これが入學後の兒童の狀況をよく表はすと云ふのは、その内容の傾向を表はすといふ場合が多いのであらう。

五 入學試験成績と高等諸學校入學者

中學から更に進んで高等諸學校に入學せんとする者は頗る多いが、今これ等のうち昨年四月各高等學校に入學した者の中學校入學試験の成績との關係を見ると次の如くである。

中學入學 試験總點	高等諸學校 入學者數	中學入學試験 に於ける全數	全數に對する%
七七・七八・五	〇人	四人	〇
七九・八〇・五	三	二二	一四

八一・八二・五	三	二六	九
八三・八四・五	一	九	一一
八五・八六・五	〇	八	〇
八七・八八・五	〇	一〇	〇
八九・九〇・五	一	四	二五
九一・九二・五	一	三	三三

これで見ると入學者は必らずしも成績の良好なるものと限ることは出来ない。併し第四年未の成績から見れば皆成績は優等であつて次の如くなる。(平均は一〇〇點であるがこれ以下のものでは一人入學したのみ。又入學者の四年未成績の平均は一一二點である。)

中學四年末 成績點數	四年末成績 該當者數	高等諸學校 入學者數	全數に對する 入學者の%
八五・九〇	二二	〇	〇
九一・九五	九	〇	〇

九六一一〇〇	一二	一	八
一〇一一一〇五	七	三	四三
一〇六一一〇〇	一三	一	八
一一一一一五	四	〇	〇
一一六一二〇	四	〇	〇
一一二一一二五	三	三	一〇〇
一二六一三〇以上	一	一	一〇〇

これによれば其間に相當の關係のあることを認めることが出来る。殊に四年の成績の甚だよいものは悉く高等學校に入學してゐるのである。而してこの四年の成績と入學試験の成績との關係の少ないことは、入學試験の成績のよいものが高等學校に先だつて入るとは云はれないことを證して居るのである。

六 概 括

これ等諸種の點數と入學後の成績との關係を通覽すると

年 級	總 點 數		算 術		讀 方		作 文	
	中學校	女學校	中學校	女學校	中學校	女學校	中學校	女學校
一 學 年	・六	・三	・〇三三	・〇八	・一四六	・四〇	・〇八	—
二 學 年	・六	・二〇	・〇〇七	・〇一	・一〇八	・三	・〇一七	—
三 學 年	・一〇七	・一八一	・〇五八	・一三	・〇六四	・六	・一五	—
四 學 年	・〇四	・五	・〇二二	・〇六	・〇一六	・三〇	・〇〇四	—

であつて、稍や入學試験の入學後の成績を覗ふに足るものは女學校に於ける讀方の成績と總點のみである。しかしこれとて低學年を除けばその關係は頗る稀薄であることがわかる。斯くの如き狀況は、一面入學試験の準備に多くの精力を費やして良き成績を得たるものも漸次その成績は學年の上るにつれて低下してゆくことを示すとも見られるのである。例へば最も準備の多い算術に於てこの關係が著しく、最も準備の少ない國語に於てこの關係が少ない。

附、他の選抜法についての考察

以上に於て入學準備の良影響とも云ふべき學力の増加が低學年に於てなくなり、入學準備のために精力を費すことの多いものが、漸次學力の減退を來す證據を統計的に知ることが出來た。更にこれ等の統計は入學試験が入學者選擇上何程の効果があるかといふことに就いても語つてゐる。こゝに於て我々は入學者選抜について充分考へなければならぬのである。

今學科試験以外の方法として心理検査及小學校成績による選抜の價値に就いてこゝに附加して考へて見やう。

A 心理検査

右に述べた如く學科による入學試験が必ずしも入學者の素質の良否を示してはゐないといふことが明かである。が、素質検査即ち心理検査による入學者の選擇法は如何なる状態にあるかを見て、學科試験との優劣を検證しやう。

大正八年東京府立第五中學校に於て文學博士田中寛一氏の行つた結果について見ると、第一學年成績との相關々係は次の如くである。

加算・四四二 反對・四六七 抹消・四五六 語構・三〇四 記憶・一五七

これに依つて見ると記憶検査以外のもは何れも著しい關係をもつてゐるのであつて、これを入學試験學科の一年の成績との關係係數、總點・三四讀方・四〇と比して語構成が劣るのみであつて、他の検査は何れも學科の成績との相關より優れてゐるのである。

又田中博士が女子高等師範學校附屬小學校に於て大正六年十月中行つた検査の成績と高等女學校に新入以後の成績との相關はこれより一層著しい度を示してゐる。

	反對聯合	語構成	置換	記憶	加算	減算	算乘	算
一年	・四二二	・六三〇	・五九四	・四五七	・四五一	・三六	一	・〇〇九
二年	・〇五五	・六九三	・六一	・四五五	・三九五	・二六五		・三三

	除	算	形抹消	數字抹消	一字抹消	二字抹消	三字抹消
一 年	・六五四	・五〇八	・二〇九	・二二四	・二六	・一七	
二 年	・五九〇	・三五九	・二四〇	・四一八	・二四	・三七	

これを學科に比べると、學科に於ては漸次相関係数が減ずるものにも、心理検査の結果に於てはかゝる傾向は全く見ることが出来ない。であるから學科試験が殆んど準備による一時的傾向を示すにも拘はらず、心理検査の結果は、その結果が比較的長く後々までも信頼出来ると思はしめるのである。たゞ精神検査はこれを入學試験に行ふ場合、兒童のその内容について知ることなきため、不安の感を懐かしめ、或はその他の事情の缺陷を生ずることはこの際注意するを要するであらう。

B 小學校時代の學科成績

多數父兄の中にも教育者中にも、入學者の選抜は小學校の成績によるのが最も害が少なく小學教育を害しないといふことを考へてゐる者が多いやうである。然らばこれ等小學校

の成績と中學校入學後の成績との關係はどうであるかと云ふと、日本女子大學校酒井千代子氏の調査によれば一年後の成績との關係は

小學校卒業成績と中等學校入學後一年の成績との關係

甲年度 〇、三八七

乙年度 〇、三一七

小學校五六年成績平均と中學校入學後一年の成績との關係

甲年度 〇、四三〇

であつて、之を學科試験によるものに見るに、讀方を除く外は之に優るものはないのである。この場合にも小學校の公正なる點數を得ることの必要は云ふまでもない。

四 總 括

以上述べた所に依つて次の事實を知ることが出來た。

一 入學試験がその後の身體の狀況に及ぼす影響は今回の調査によつては明かにする

ことは出来なかつた。たゞ知り得たことは入學後一年間に於て入學試験準備のために身心の不健康なる状態が繼續して、神經衰弱を起し一年休學するの止むなきに至るものがあるといふ事實だけである。併しながら之に依つて推考すると、全國に於て各學年に於ける病氣休學又は病氣退學の調査をしたならば、此の間の影響は可なり著しく表はれるであらうと思ふのである。

二 入學試験に於ける學科試験の成績と入學後の成績との關係は、國語に於て最も著しく算術に於て最も少ない。この關係は

イ 入學試験準備の効果はたゞ低學年にのみ存する。

ロ 入學試験準備に過度の勉強をし精力の過大な消耗をしても、高學年に至つては能力は漸次減退する。

ハ 入學試験成績によつて入學後の成績の如何を豫知することは、國語に於ける些少な豫知性を除いては殆んど不可能である。

の三點を推定せしめるものがあるのである

第三 結 論

以上われ／＼は第二及び第三に於て入學試験準備の状況とこれが身體に及ぼす影響について知り、更にかゝる負擔を課したる結果の兒童に及ぼす影響についても觀察した。

これを一般社會の人々にとつては、兒童の個性に對する認識と學校についての眞の理解を進めることが、この入學難に對して一面の光を與へるものとなることを知り、これを學校當局にとつては、徒らに入學志望者の多きを誇り、試験問題の困難を標榜するが如きことの愚なること、その選擇の方法についての十分な考察の必要なることを知ることができれば、本調査を公表するの意味はすでに十分に達せられたものと云ふことができる。

2756
29

社會教育パンフレット

發行豫定

- 第一輯 (既刊) 中等學校生徒思想調査 文部省普通學務局
- 第二輯 (既刊) 青少年と活動寫眞 東大助教授 青木誠四郎
- 第四輯 (三月廿五日) 中等學校生徒思想調査合評 社會教育談話會
- 第五輯 (四月五日) 社會教育ポスター集(原色版) 文部省普通學務局
- 第六輯 (四月二十日) 不良少年の調査 文部省普通學務局

目的 事務所 經費 入會 贊助員 役員費

會則(抄)
 本會は社會教育の發達普及を圖るを目的とし、特に青少年男女の教養指導に資せんことを期す
 本會は事務所を東京市小石川區白山御殿町百二十七番地に置く
 本會の經費は資産より生ずる収入會費及び寄付金その他の収入を以て充つ
 本會に入會せんとする者は住所、氏名、業務等を記したる入會書を提出し理事會の承認を得るを要す
 本會に入會したる者を贊助員と稱す贊助員は會費一口以上を納付するものとす、但し之を分納することを得
 會費一口一ヶ年分六圓半ヶ年分三圓

會長 一名
 理事 十一名乃至十七名
 監事 二名
 評議員 若干名
 顧問 若干名

大正十五年三月八日印刷
 大正十五年三月十日發行

社會教育パンフレット第三輯

小松 助 發行所
 東京市小石川區白山御殿町七廿七番地
 内田 廣 蔵 印刷所
 東京市足立區山崎町一八九番地
 内田 印刷所
 東京市足立區山崎町一八九番地
 財團法人社會教育協會
 東京市小石川區小石川五〇九
 振替口座東京一八三

會員に限り頒布

2756
29

社會教育パンフレット

發行豫定

- 第一輯 (既刊)
 - 中等學校生徒思想調査
 - 第二輯 (既刊)
 - 青少年と活動寫眞
 - 第四輯 (三月廿五日)
 - 中等學校生徒思想調査合評
 - 第五輯 (四月五日)
 - 社會教育ホスター集(原色版)
 - 第六輯 (四月二十日)
 - 不良少年の調査
- 文部省普通學務局
- 東大助教授 青木誠四郎
- 社會教育談話會
- 文部省普通學務局
- 文部省普通學務局

會則(抄)

目的 本會は社會教育の發達普及を圖るを目的とし、特に青少年男女の教養指導に資せんことを期す

事務所 本會は事務所を東京市小石川區白山御殿町百二十七番地に置く

經費 本會の經費は資産より生ずる收入會費及び寄付金その他の收入を以て充つ

入會 本會に入會せんとする者は住所、氏名、業務等を記したる入會書を提出し理事會の承認を得るを要す

贊助員 本會に入會したる者を贊助員と稱す

會費 贊助員は會費一口以上を納付するものとする、但し之を分納することを得

役員 會費一口一ヶ年分六圓半ヶ年分三圓

會長 一名

理事 十一名乃至十七名

監事 二名

評議員 若干名

顧問 若干名

大正十五年三月八日印刷
大正十五年三月十日發行

社會教育パンフレット第三輯

小松謙助 人行發售編輯
地址七廿百町原山白區川石小市京東

內田廣藏 印刷所
地址八九一町原山區込牛市京東

內田印刷所 印刷所
地址八九一町原山區込牛市京東

財團法人社會教育協會
地址七廿百町原山白區川石小市京東
九〇五七川石小話電
三八一二京東座口替振

會員に限り頒布

終

